

平成23年 8 月 5 日

平成23年

第 3 回教育委員会臨時会会議録

大田区役所 第五・六委員会室

平成23年第3回教育委員会臨時会会議録

平成23年8月5日午後2時大田区教育委員会臨時会を開催した。

櫻井光政	委員	委員長
藤崎雄三	委員	委員長職務代理者
横川敏男	委員	
鈴木清子	委員	
野口和矩	委員	
清水繁	委員	教育長

計 6 名

2 出席した職員

教育総務部長	金子 武 史
教育総務課長	松 本 秀 男
施設担当課長	西 野 正 成
教育事務改善担当課長	室 内 正 男
学務課長（私学行政担当課長兼務）	飯 田 衛
校外施設整備担当課長	星 光 吉
指導課長（幼児教育センター所長兼務）	小 黒 仁 史
副参事	菅 野 哲 郎
教育センター所長	菅 三 男
社会教育課長	木 田 早 苗
大田図書館長	原 聡

計 11 名

3 教科用図書採択の審議に出席した関係職員等

指導課 統括指導主事	増 田 亮
指導課 統括指導主事	大 川 優
指導課 指導主事	早 川 隆 之
指導課 指導主事	岩 崎 政 弘
指導課 指導主事	鈴 木 富 雄
指導課 指導主事	小 林 繁
指導課 指導主事	塩 野 恵
指導課 管理係長	桶 川 和 則
指導課 管理係 主任主事	相 馬 毅
指導課 管理係 主事	戸 田 侑 希
教育総務課 庶務係 主任主事	小 島 浩 二
教育総務課 庶務係 主任主事	金 澤 欣 一

計 12 名

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 13 条及び大田区教育委員会会議規則第 3 条により、第 3 回大田区教育委員会臨時会を招集した者は、次のとおりである。

委員長 櫻井光政

-○委員長

ただいまから、平成23年第3回教育委員会臨時会を開催する。

本日は、昨日、一昨日に引き続き、中学校教科用図書採択の審議を行うので、大田区教育委員会会議規則第14条により、関係職員等の出席も求めている。

これより審議に入る。本日の出席委員数は定足数を満たしている。よって会議は成立している。

本日は、定員を超える傍聴希望者が見込まれる。傍聴の定員は大田区教育委員会傍聴規則第5条により10名と規定されているが、同条ただし書きに「委員会が必要と認めるときはこれを変更することができる。」とある。これは、「中学校教科用図書調査委員会からの報告」があり、教科書採択への区民の関心が高まっているためだと思われる。

私としては、区民の関心に応え、公平公正な「開かれた教科書採択」を行うために、大田区教育委員会傍聴規則第5条ただし書きにより、本日の定例会における傍聴人の定数を100名に増員し、傍聴希望者に傍聴を許可したいと考えるが、いかがか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

傍聴を許可する。

(傍聴希望者入場)

○委員長

大田区教育委員会傍聴規則第7条により、傍聴人は議場における言論に対して批評を加え、又は拍手その他の方法により公然と可否を表明することは禁止されている。協力をお願いします。

なお、本日は各報道機関から取材の申し込みがあり、教育委員会について区民に広く周知するよい機会になるととらえ、編集等によりその内容に誤解が生じないように留意することを条件に許可している。

次に、会議録署名委員に横川委員を指名する。

## 日程第1 平成24年度使用大田区立中学校教科用図書採択について

○委員長

第8回定例会、第2回臨時会に引き続き、教科用図書の審議を行う。

一昨日の定例会では、国語、書写、数学、理科の4種目について審議した。昨日の臨時会では、社会(地理)、社会(歴史)、社会(公民)、地図、音楽(一般)、音楽(器楽)、美術、保健体育の8種目について審議した。本日は、技術・家庭(技術)、技術・家庭(家庭)、英語の3種目について審議する。

初めに、技術・家庭(技術)について審議する。発行者は3者ある。技術・家庭(技術)について各委員の意見ををお願いします。

## ○野口委員

私は3者の中で、「A」「D」の2者に絞った。昨日、一昨日も申し上げたが、教科書を選ぶ際の観点は、一つ目が、地元大田区を教材としている教科書であるか。二つ目は、小学校とのつながりがある教科書であるか。三つ目は、今回の東日本大震災等に関連している、それを見通した検討がされているか、四つ目は、中学校としての専門性を生かしているか、これらを主に見てきた。そういう観点から、技術・家庭（技術）を「A」「D」の2者に絞った。

小学校からのつながりという観点から見ると、「D」の3ページに、わかりやすく「小学校での学習を思い出してみよう」、それを受けて中学校の「技術分野で学んでいこう」ということが書かれていて、良いと思った。

それから、震災関連の説明等については、3者ともに、水の節約、エネルギー消費等について書かれていて、これについては大差ないと思った。

それから、他の科目で取り上げているのかもしれないが、携帯電話についてもう少し取り上げてほしい。携帯電話のマナー等については、「D」の「利用するときのモラル」も良いと思った。

最終的に、私は「A」の裏表紙に本区の北嶋絞製作所の写真が掲載されている。「A」は、この写真だけではなく、中身も教科書らしい教科書で、わかりやすい教科書だと感じた。「A」「D」で迷ったが、私は「A」を推薦したい。

## ○教育長

私は「D」にしたい。

その理由としては、まず本文の学習の前のイントロで、技術とはそもそも何なのか、その役割は何か、わかりやすく示されている。生徒たちが、これからどんな学習をしていくかという方向性をつかみ、興味を持つように説明していて、学ぶ意欲を高めている。

もう一つは、私は毎年、ものづくり教育・学習フォーラムを視察している。ここに参加する生徒は木工細工などをするが、事前に十分学習をして、安全に効率的に作業してもらいたいと思うところがある。

この要請を満たすという点において、この「D」は22ページから「ものづくりの工夫と進め方」として、写真やイラストを豊富に使ってよく説明しており、このテキストをもとにして、事前に十分勉強してくれば、のこぎりの使い方その他、安定した使用ができて技術の学習にはいいと思った。

## ○鈴木委員

私も「A」「D」に絞って検討し、最終的には「D」を推薦する。

「D」の場合、今、野口委員の意見にあったとおり、情報化社会におけるネットワークとセキュリティーなどについて書かれている。参考では、コラム形式で安全性などについてしっかり指摘している。昨今の課題である「情報モラルと知的財産」については、「人権や個人情報の保護」やインターネットや携帯電話を「利用するときのモラル」に

ついて、詳しく書かれている。子どもたちは、情報に関する技術やモラルなどのシステムを学び、安全性は担保できるようにならなければいけない。

それから、「D」の118ページから127ページには、いろいろな実習例が出ている。また、「機器の安全な利用と保守点検」の中には、子どもたちが、使う機会が多い自転車の調整や点検についても非常に細かく載っている。このような実習例や点検などをみながら、興味を持つことができると思う。「D」は、製作実習の中に、失敗したときの修正方法もきちっと載せている。

先ほど、教育長の意見にもあったが、大田区のものづくり教育の推進にも準じていると感じた。

#### ○横川委員

私も「D」を選んだ。

他の委員が「D」の良さについては話したが、鈴木委員からあった実習で修正方法がたくさん出ているということが、私も良いと思う。私が中学生のときの経験に、技術で失敗して困ったことがよくあった。やはり中学生になると、修正方法がきちんと出ているというのは大変ありがたい。

#### ○藤崎委員

私も「D」を推したい。

どの教科においてもそうだが、常に私の観点は、子どもたちが教科離れをしないためにはどれが良いかという点である。1人でも多くの子どもたちの関心を引きつけるための工夫がされているかという観点で見ている。

単元については、どの発行者も大きく四つに分かれていて、目次で確認したところ順番も一緒であった。各者の差別化がわかる部分は、どこかと見比べた。「D」は、すべてのページ右上に、その単元で利用する工具や、あるいはパソコンや電話等の昔からの変遷がたどれるような写真が事細かに載っている。また、ほぼ全ページにわたってページ下にある「豆知識」で、その単元で習ったことに関連していることを興味深く材料として提供しているところがあった。これらは、子どもたちが家に帰って教科書をめくることを考えたときに、他者より長けていると思った。

#### ○委員長

私も結論的には「D」を推したい。

なぜかというと、情報に関してセキュリティーとかモラル、知的財産、そういった点の記述が一番厚いからである。技術・家庭（技術）では、のこぎり、万力、旋盤などの危険なものを扱うときに、きちんと注意することが大事だ。今は、情報を扱うことの危険さというのは、そういう物理的な危険さに劣らないものがある。そういう危険性について、きちんと触れてあることがとても大事だと思った。

3カ月ぐらい前だが、実はこういう事件があった。高等専門学校に通う男の子が友達のためにサービスで良かれと思って、いろいろなネットで飛び交っている音楽や映像をディスクに焼いて安い値段で分けてあげていた。それが著作権法違反ということで、逮

捕されて少年審判に係るといような事態になった。本人はそんな大変なことだとはわからないわけだし、一方、そういう情報提供をしているものにとっては、それは万引きしたことより被害がずっと大きいという捉え方をする。ここは、きちんと中学生のときに、こういった勉強をしていたら、そんな事件はなかったのだと感じた。その点で、かなり厚く書いてあるように感じられる「D」を推したいと思った。

では、まず「A」を推したい方、挙手をお願いします（1人挙手）。「D」を推したい方は、挙手をお願いします（5人挙手）。

「D」が多数なので、技術・家庭（技術）は「D」ということでよろしいか。

（「異議なし」との声あり）

#### ○委員長

では、技術・家庭（技術）は「D」とする。

それでは、続いて、技術・家庭（家庭）について審議をする。家庭の発行者は3者である。

それでは、各委員からの意見をお願いします。

#### ○横川委員

私は、3者の中から「A」「D」が候補に残り、最終的には「D」とした。

「D」の良いところは、具体例が多いということと、「食生活と自立」というところが大変良くできていた。中でも、献立なども良くできていて、私自身は、料理は苦手だが、この本があれば料理ができるようになるのではないかと思わせるような記載例があった。

それに対して、「A」は、もちろん食事の献立などもよくできている。「A」のいいところは、「幼児と触れ合おう」というところで具体例がよく出ていることと、「手の洗い方」が非常によく懇切丁寧に出ていることだ。「A」もいいと思ったが、総合的に見て「D」のほうが少し優れているのではないかということで、私は「D」に決めた。

#### ○鈴木委員

私も「A」「D」に絞って比較した。結論としては、「D」を推薦する。

内容としては、巣立ちの部分、まず食から入っている。家族、衣食住、環境、それから世界に目を向けた流れの構成になっている。それぞれに、「学習の目標」が置かれており、売り買いのコーナー、それから「発展」などのページで広く世界に目を向けて書かれている。「布を用いた物の製作」の中の小物や衣服の製作では、私の時代と比較して、懇切丁寧に書かれている。各家庭で、保護者とお子さんが一緒に料理や裁縫をするということは、子どもが小さいときは興味を持ってやるが、中学生くらいになると他の学習をしっかりとやるようになってきて、あまり一緒に作る機会がないのではないかと思う。そういう点では、「D」は非常に丁寧につくられているので、これを見たら繕い物も小物の袋物も自分でやってみようかなと思うのではないかと感じられるところが、非常に多く見られました。

「D」の「発展」は、コラム形式になっていて、地域との関わりやボランティア、社

会に向けての参画するというようなところも触れていた。家庭から地域、社会、世界へとグローバルな考え方をしていくためには、これからコミュニティをしっかりと作り、社会とつき合っていくことは、とても大切な部分である。そういった点で、「D」は、家庭科でありながら、いろいろなものに目を向けてしっかりと記載されていると感じた。

#### ○野口委員

家庭科の教科書が1冊あれば、生涯、生活ができるのではないか。今、教科書を大事にしない子どももいるが、どの教科書に決まっても家庭科の教科書はずっと取っておいたほうがいいと、そう思わせる教科書だ。

地元大田区について書かれているか、小学校からのつながりはどうかという私の二つの観点からは、あまり関連する記載はなかった。

今日、テレビで「地元の食材を使った給食」というのを見た。大田区では、小学校で時々地元の食材を使ったり、中学校では校長が作ったジャガイモが入った給食を作ったりしていると聞いたことがある。そこで私は、食生活、要するに食育ということについて、家庭科の教科書を重点的に見ていった。「知育・徳育・体育」に「食育」が加わる。実は、「食育」という言葉は、まだ広辞苑や教科書に載っていないが、「食育」の推進は、今後、当然やっていかなければならない。「食育」を親がやるべきだと認識しているが、「育む」とは、「羽でくくむ」が語源になっている。すなわち、親が雛を羽でつつんで暖めて、それで育てていくのだ。本来、そうなるといいが、まさに親がそれをやらないといけないのにそれができない、それを学校で教育するのが「食育」ではないか。これが、この家庭科の一番のこれからのポイントではないかと思う。

各者の教科書に大差はないが、「A」「D」がいいのではないかと思う。「調理」についてはどちらかというところ「A」が見ながら作りやすいかと思うが、料理本にあるような説明の仕方をしているのが「D」の方かと思った。

「D」の85ページには、見開きで実物大の野菜、魚などが出ている。これは、中学生にもわかりやすく、「D」がいいかと思った。

また、両者ともに、最後は「共生」という言葉で締めくくっている。「D」の「未来に向かって」というところでは、「大人になる喜びと不安の中にいる私たちは今、生活の自立に向かって歩き始めました。これからの道のりは、人と人がつながり、家庭と地域がつながり、」、本当はここに学校が入ってくるとよかったが、「さまざまな国の人とつながりながら、みんなで自然と共生する未来を紡いでいこう。」ということが書いてある。「紡いでいく」というのは、先程申し上げた、「育む」という意味で、前にも「紡ぐ」という意味だと思う。その右には、「手紙～拝啓 十五の君へ～」が載っている。私は、各者それほど大差はないが、家庭科については、最終的には「D」がいいと思った。

#### ○教育長

私も、技術・家庭（家庭）については、「D」とした。

その理由としては、最初に「家庭分野を見通す」として、A章からD章までの学ぶ方向性について端的に写真などを使って示しており、これから何があるのかをイメージが



しやすくなっている。それから、A章の「家族・家庭・子どもの成長」では、「自分の成長を振り返る」ということがあり、誕生から青年期までの時間軸のレイアウトを非常にわかりやすい写真なども使って例示している。ここにおいて自分がどういう時間軸に位置付けられているのかという、自分を見直すためのポイントがはっきり出ている。そして、自分が成長する過程で自分を支えてくれていた人々を確認できるようにして、それも踏まえて「家庭のはたらき」等、詳説をしていく。これは非常に自分の誕生から現時点まで振り返った上で、そこにおいていろいろな人々が自分に関わってくれて、今の自分が存在しているといったことが学べるようになっており、学習の意欲がわきやすいと思う。またB章、C章、D章においても導入から実践の学習に向かってスムーズに進むような工夫があると考えられ、大変内容は充実していると思っている。

これは、大田区の教育委員会の教育目標として、「他者への思いやりと規範意識を持ち、社会の一員として」行動できるような人材を育てていこうと言ったときに、大上段に道徳ということを持ち出さなくても、この家庭分野についてしっかり学習することによって、自分の他者に対する関係性や、他者に対する感謝の気持ちその他が育まれていくのではないかという感じがして、私は「D」を推薦したいと思う。

#### ○藤崎委員

私は、こういう言葉を使ったら乱暴かもしれないが、食べる物、着る物、簡単にいうと今の子どもたち、自分の子を見たり聞いたりしていると「買えばいいじゃん」と一言で片づけがちなので、作る楽しみも彼らに味わってもらいたいと感じた。子どもたちが、これであれば作れそう、作りたいと思うような、興味を引くような展開をしているところが、文字だけよりは写真やいろんなイラストが出ているほうが彼らは取っ付きやすいだろうと思う。このことから、私も「A」「D」の二者に絞って見させていただいた。

その後、最終的に私は選んだのは、やはり興味・関心を引くということでページの下に「豆知識」やほかの情報も入れながら、いかに教科書から離れないように工夫をしているかというような観点から、最終的に私は「D」を選ばせていただいた。

#### ○委員長

私も結論的には「D」がいいと思う。

「D」のどこがいいかというと、触れないといけないところは、みんな触れている教科書だが、気配り・心配りを感じるのが「D」であった。例えば、中学生というか、子どもが好きなハンバーグステーキの作り方は、3者とも載せている。「C」は、普通につくり方や焼き方が書いてある。「A」は少し丁寧になっていて、大事なことが書いてある。「衛生」で「厚めの形にすると火が通りにくく、中心部が生焼けの状態になり、食中毒の原因になることがあるので注意する。」と書いてある。こう書いてあるが、子どもが初めてつくる場合は、だから注意しないといけない。「D」だけは、煮込みハンバーグになっている。つまり、焼き損ねた失敗がなく、中まで火が必ず通る。子どもたちが、初めてこれを見て作っても煮込みハンバーグだから火が通ってしまうのだ。それで、煮込まずに焼く場合はこうだというふうに書いてある。

また、火加減だが、「A」は、「強火で両面の表面を焼く。次にふたをして中火で中

まで火を通す（焼き時間は約10分）。」と書いてある。これは普通のガスレンジを使った方だったらわかると思うが、中火にして10分焼いたら食べられないと思う。中火とか、火加減の概念の問題なのかもしれないが、普通なら、ガスレンジに火を点けて、大・中・小としたときの中だと、必ず食べられない代物になってしまう。「D」は、焼く場合に「中火で焼いた後ふたをして弱火で10分間焼きます。」と書いてある。だから、実際作ってみて、あるいは子どもに作らせてみて、ちゃんとできるという配慮がなされているのが「D」だと思った。そういうような、全体を貫くクオリティが、差になっているのではないかなという感じがした。

意見が出そろったが、すべて「D」を推す意見だったと思うので、技術・家庭（家庭）は、「D」ということでまとめてよろしいか。

（「はい」との声あり）

#### ○委員長

では、技術・家庭（家庭）は、「D」とする。

それでは、英語について、審議する。英語の発行者は6者である。各委員の意見をお願いします。

#### ○野口委員

今年度から小学校で英語の授業が入り、取り組むようになった。そこで、小学校で始めた英語が中学校でどのようにつながっていくのかということを考えながら、特に1年生の教科書を見た。そして、英語の専門教員に、あるいは専門家に話を聞いてもみた。

先日、道塚小学校において外国の小学生たちと交流しようという会があった。私は、どのような会なのかと思って行ってみた。1年生から6年生の全員が暑い中集まって10人ぐらいの外国の人たちと交流していた。子どもたちは、外国人と英語と日本語で会話していたが、とにかく楽しそうなのだ。こういう会が我々のときにあったら、英語を好きになり、英会話もできるようになったのではないかと思った。

このような小学校で楽しかった英語を、子どもたちが中学校1年生になったときに、いかに嫌いにならずに、興味を持たせてあげられるかが大切だ。私は、中学校に入ってすぐに、英語が嫌いになった。なぜ嫌いになったかという、とにかく暗記しろ、暗記しろ、書け、書けと言われたからだ。今の中学生が英語を楽しくやるにはどういう教科書がいいのかといろいろな資料や調査委員会等の報告を参考にして、いろいろと検討した。私は「A」「D」「E」の3者に絞った。小学校とのつながりを重点的にみて、どの教科書を使ったら最適なのかを検討した。この3者のうち、一番英語の教科書らしいと思ったのは、「A」である。「A」は、現在、大田区の中学校で使っている教科書だ。私は、英語の教科書は変えないほうが良いと思った。「A」が一番良いと思った。

あるいは、例えば小説を読んで、1巻目を読むと2巻目、3巻目が読みたくなるというような教科書であっても良いと思う。先程は挙げなかったが、「J」はストーリー性があり、1年生から3年生まで一貫したつながりがあった。

「A」「E」で迷ったが、最終的には「A」とした。

## ○教育長

私は最終的に「E」を選んだ。これと拮抗するのは「F」と考えた。

「E」は一般動詞から入り、「F」は従来のbe動詞から入っていくという方法論の違いがある。その方法論の違いは大きな差ではないと思う。

「E」を選んだ理由は、大田区は毎年アメリカとそして今年からはドイツも含めて、中学校28校の生徒56名を海外派遣している。その海外派遣にあたっては、基礎的、日常的な会話、それから海外旅行の場面で使う実用性のある会話などが習得されていると便利だということの一つがある。日本の伝統的な文化である相撲、柔道、漫画といったものを紹介することができるのと現地で話題が豊富になる。「E」は、こういう実用性のレベルが非常に高いと感じた。

一方、「F」は、中学校3年生の教科書においては、大変興味深い高度なレベルの文章が載っていて、英語好きな子どもにとって、これは非常に優れた教科書だと思っている。

全体的に小学校5年生、6年生の英語の会話の延長線と考えると、「E」のほうがスムーズに接続できると考える。もちろん、「F」も一般的な会話だけで構成されているのではなくて、例えばアンネの日記などが入っていて、これもかなりシリアスな内容で人間はなぜ戦争をするのかと問いかけたり、人の心の底には人を殺したいというような気持ちもあるのかと投げかけたり、なかなか考えさせるようなものが入っている。読み物もまずまずのレベルなので「E」とした。

## ○横川委員

私は、「E」「D」の二つで迷った。

まず、「E」「D」の違いは、「E」ほか、「D」を除く教科書が最初に文書本文が書いてあり、その中のキーになる文章を基本文として取り出している。「D」は、その逆に、最初に基本となる文章が出ていて、後で本文が出ている。私が中学生だった場合、文章を覚えるという意味では最初に基本文があって、それからその基本文を使った本文が後に来ているほうが、もしかしたら覚えやすいのかと思った。「D」は、参考書的な形になっている。しかし、専門家の意見などを聞くと、文章が最初に出ていて、それを読みこなして、そこから基本文の大事な文章や言葉を覚えたほうがいいのではないかとということで、これも参考にさせていただいた。そして、最終的には「E」になった。

「E」は、扱っている題材がいろいろあり、生徒の興味をいろいろと引き出しやすい。例えば、2年生では日本のスポーツ、世界遺産、漫画とアニメ、日本映画やマザーテレサが題材となっている。3年生ではアンネフランクの日記、キング牧師、映画「グース」からの抜粋なども出ていた。中学生が興味を持って読みたくなるようなものがたくさん載っているのが「E」だったということもあり、最終的に「E」を推薦することにした。

## ○鈴木委員

グローバル化した社会の中で、子どもたちは英語を覚えなないといけないということで、幼稚園の頃から英会話などを熱心にやっている。小学校でも英会話から入って、しっか

りと身につけようと授業をやっている。我々が子どもの時代は、文法から入って、辞書を引いたりした。調査委員会の資料なども参考にしながら、各者の教科書を見ていった。先ほど、教育長の意見にもあったが、「E」は、日本の伝統的なものがたくさん使われている。ニュースや平和環境、内外の映画などを題材にしたものを資料として使っているというところは、子どもたちの関心度が高くなると思う。

1年生の教科書を見比べると、教育長の指摘のとおり、一般動詞から始まったほうがわかりやすいと改めて思った。ほかにも「E」は、チャプターとチャプターの間に「付録」として英語の歌のページがある。その歌のページは、皆さんのわかるような歌が載っていて、一息つくような感じがする。歌というのは、英語を覚えるには非常に良いと聞く。歌いながら英単語や、流れを把握していくのも良いと感じた。

つい最近まで「一芸に秀でた」という言葉が大学ではやったようだが、あえてそうしなくても子どもたちがどの教科が好きなのか、好きなものをしっかり学んでいくと良いと思う。好きなものであれば、子どもたちは自主的に取り組み、育っていくので、何事も好きになったほうが良いと思う。

新学習指導要領のポイントとしては、まず「聞く、話す、読む、書く」を総合的にしっかりと身につけようとする。

最終的に、私は「E」を推薦したいと思う。

#### ○藤崎委員

野口委員の意見を聞きながら、ふと昔のことを思い出した。私は、小学校の中学年、高学年と英語圏の国にいて、日本に帰ってきた。これは、教科書の問題ではなく、教え方の問題というか、教員の問題だと思うが、当時の英語教員は「それは教えていません。それは会話では通用するけれど、文章としてはおかしいです。」と行って、全部バツになる感じであった。それで、もう絶対に英語は勉強しないと記憶がある。ただ、その先生から学んだこともあった。それは何かというと、「楽しい英語と学問としての英語は違う」という、その言葉が強く残っている。今回、日本でも小学校から英語になれる親しむコミュニケーションという場合は、非常にいいことだと思うが、野口委員の意見にあったとおり、あんなに楽しかった英語の授業が中学に入った途端に嫌いになってしまうともったいないと思っている。

私が考える英語のテーマは、1年生では、入りやすさ、要は英語とのなじみということだ。英語は怖くないとなれ親しむ。2年生は海外への興味ということで、英語圏以外のところも含めて写真がどれだけ出ているか、要は子どもたちが英語を話せるようになって、世界へ出て行けると思えるか、手段としての英語を使って、外に出て行けるのだよという興味を持ってほしいということだ。3年になったら英語という手段を使って、お互いに話をしてみよう、やりとりや議論につながっていってくれば良いと思う。

こういう観点でこの6者の教科書を見た。

特に最初でつまずくところは一番避けたいと思っているので、1年生の入り方を見た。その一つ一つの教科書の構成として、私も「E」「F」で最後の最後まで悩んだ。

例えば、どういうことを学ぶかということ、「F」の1年生の4ページを開くと、目次の次に「各レッスンで学ぶこと」が一覧になっている。きれいにまとめられている。一

方、「E」には一覧はないものの、各単元（チャプター）の頭で絵と言葉を使って、ここでは最終的に何ができるようになるためのものなのかが書かれている。例えば、「E」の1年生81ページ「Chapter 3」で扱うのは、「日本のお正月」「初めての点字」「Reading 2」であると表示されている。これらのテーマを通して、実際にこんなことを学び、この章が終わるとこんなことができるようになっていくという目安が書かれているのがわかる。隣の80ページの一番下を見ると、日本語と英語の構造の違いというのが出ている。例えば、日本語で「何時ですか」が「何時」「です」「か」に色分けされていて、英語でその語順が変わって「What time is it?」となる。「Where is ~?」などの問いも含めて、日本語と英語との構造の違いが書いてある。子どもたちが、英語を嫌いになるかならないかの前に、そもそも日本語と英語との構造が違うのだということから入っている。まず、その構造を押さえれば、最初の段階であまり大きくつまづくことはなく、英語を嫌いになることを防げるのではないか。こうしたところが、わかりやすく出ているところが「E」「F」でいうと、私は「E」のほうがよかったと思う。

ただ、なぜ最後で迷っているかということ、3年生に望みたいことは英語というツールを使ってお互いに自分の意見を述べ合えるかというときに、その題材として扱われているのが、「F」は、社会の問題などのいろいろなことをかんがみた題材として、非常に興味の湧くものが載っている。あわせて、他の教科で今まさに勉強していることを今度は英語を使ってやってみようとか、読んでみようというところの興味の引き方というのは「F」のほうが長けていると思っている。1年生の入りやすさ、ここで転んでしまうと3年までたどり着かないので、私の中では苦渋の選択で、まず入りやすさの「E」を選択させていただきたいと思う。

#### ○委員長

私は迷いに迷いましたが、結論的には「F」を推したいと考えている。

当初は、「E」が良いのではないかと考えていた。それは、私は、動詞は一般動詞から入ったほうがつまずきやしくないというかなり強い思いを持っている。それは、私は一般動詞から習ったが、私の中学校の友達にbe動詞から習う学校から転校してきた転校生がいて、やはり動詞のところではつまずいている。それから、私自身の子どもが中学校時代にやはりbe動詞から入ったことで、たまたまつまらずいた。身近に続けてそういうことがあったものだから、一般動詞から入っていく教科書のほうがいいのではないかとというのがかなりコアの部分にある。そのほかにも、いろいろな教科書的なつくりのよさという点で、「E」に一日の長があると思っていた。

ただ、藤崎委員の意見にもあったが、3年生の内容を見たときに、「F」の扱っている題材というか、教材が非常に魅力的で、私はキング牧師の「I have a dream」のエピソードと、それからキング牧師の演説から50年たった今、オバマ大統領がリンカーン・メモリアルの前に立って演説をしたのだ。キング牧師の「dream」は「dream came true」本当のことになったのだということに、非常に感銘を受ける。これだけを読んでも感銘を受けるので、これまで英語が好きな中学生が、自分たちが覚えた英語でこういうものを読めたときの喜びというか、達成感というか、よし、もっと深めていくぞと

いうものは、かなり大きいのではないかなという風に思った。

英語で何を重点的に教えるかというのは、すごく難しいことなのだが、100人、200人のたくさんの子どもが日常的な会話をできるようになる、あいさつができるようになる、これも大事だが、ものすごく英語が好きでできる子どもが難しいものをどんどん読んでいける、そういう力もまた大事だと思う。公立学校ではこの両方を満たしていかないといけない。そう考えたときに、私は、「3年間先生に教えてもらったおかげで英語が好きになったよ」「これだけ読めるようになったよ」という喜びを子どもたちに持ってもらいたいという感じがして、それを考えると悩んだ末、私は「F」を推したいと思った。

では、他にこれは言っておきたいということはあるか。

では、少し意見が割れているところがあるので、決をとりたいと思う。まず、「E」を推薦したいと思う方、悩まれたと思いますけれども挙手をお願いします（4人挙手）。念のため「A」を推薦する方は挙手をお願いします（1人挙手）。私が「F」だが、「E」が多数なので、英語は「E」ということでよろしいか。

（「異議なし」との声あり）

○委員長

英語は「E」とする。

では、ここで30分間の休憩とする。

（ 休 憩 ）

○委員長

教育委員会臨時会を再開する。

## 日程第2 「議案審議」

○委員長

第8回定例会、第2回臨時会と本日の3日間で審議し、追加議案となった中学校教科用図書採択に関する第51号議案から審議したいと思う。

では、第51号議案について、事務局から説明を求める。

○教育総務課長

それでは、第51号議案 平成24年度使用大田区立中学校教科用図書採択について説明する。

平成24年度使用大田区立中学校教科用図書については、7月20日の第7回教育委員会定例会において、教科用図書調査委員会委員長から調査報告について説明をいただき、一昨日の第8回定例会、昨日の第2回臨時会と本日の第3回臨時会の3日間にわたり審議いただいた。ここで本案を議案として提出し、平成24年度使用大田区立中学校教科用図書の採択をお願いします。中学校教科用図書について、種目、発行者、書名の順に申し

上げる。

平成 24 年度使用大田区立中学校教科用図書

種 目	発行者	書 名
国 語	光村図書	国語
書 写	学校図書	中学校書写
社会（地理）	帝国書院	社会科 中学生の地理 世界のすがたと日本の国土
社会（歴史）	育鵬社	中学社会 新しい日本の歴史
社会（公民）	育鵬社	中学社会、新しいみんなの公民
地 図	帝国書院	中学校社会科地図
数 学	教育出版	中学数学
理 科	学校図書	中学校科学
音楽（一般）	教育芸術社	中学生の音楽
音楽（器楽）	教育芸術社	中学生の器楽
美 術	光村図書出版	美術
保健体育	大修館書店	保健体育
技術・家庭（技術）	開隆堂出版	技術・家庭（技術分野）
技術・家庭（家庭）	開隆堂出版	技術・家庭（家庭分野）
英 語	学校図書	TOTAL ENGLISH

○委員長

平成24年度使用大田区立中学校教科用図書についての意見はあるか。

（「なし」との声あり）

○委員長

では、第51号議案について、原案どおり決定してよろしいでしょうか。  
(「異議なし」との声あり)

○委員長

第51号議案について、原案どおり決定する。  
次に、第50号議案について、事務局職員に説明を求める。

○教育総務課長

第50号議案 学校教育法附則第9条の規定に基づく平成24年度特別支援学級使用教科用図書採択について、説明する。

大田区教科用図書採択要綱第14条には、第1項において「区立学校に設置されている特別支援学級で使用する教科用図書については、区立学校の通常学級で使用する教科用図書を使用する」、第2項において「前項の規定に関わらず学校教育法附則第9条に規定する教科用図書を使用する必要があると教育長が認めた場合は、特別支援学級設置校の公聴会が審議し、適切と考える教科用図書を教育委員会に報告する。」とある。

なお、学校教育法附則第9条に規定する教科用の図書の採択については、児童・生徒の実態により一層対応した教科用図書を選定するために、義務教育小学校の教科用図書の無償措置に関する法律施行例第14条の規定から除外されており、4年間によらず採択をしている。

教科用図書の選定については、指導課長から説明する。

○指導課長

特別支援学級で使用する教科用図書の選定について説明する。

各設置校の児童・生徒の障害の種類・程度・特性に最もふさわしい内容・文字・表現・挿絵・取り扱う題材であるという観点、可能な限り系統的に編集されており、教科の目標に沿う内容を持つという観点、特定の教材、もしくは一部の分野しか取り扱っていない図書、参考書類的図鑑類、問題集等は除くといった観点のもと、特別支援学級設置校の校長会が東京都教育委員会の特別支援教育教科書調査研究資料、各設置校の意見を踏まえた上で、適切と考える教科用図書として選定した。

また、報告された図書の一覧については、別紙のとおりである。

○委員長

学校教育法附則第9条の規定に基づく特別支援学級使用教科用図書についてのご意見はあるか。

(「なし」との声あり)

○委員長

それでは、原案どおり決定してよろしいでしょうか。  
(「異議なし」との声あり)



○委員長

第50号議案を原案どおり決定する。

傍聴の方へお知らせする。ただいま、採択した「平成24年度使用大田区立中学校用教科用図書」の一覧表は、6階指導課の窓口にて配布する。

これをもって、第3回教育委員会臨時会を終了する。

(午後3時32分閉会)